

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 61 号 2017 年 9 月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel : 03-5466-0529 (研究室)

Fax : 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail : info@ko-sho.org

問うに落ちず……

高木 史人

いまから 20 年程以前、大正末年生まれのお爺さんを訪ねた。暑い日だった。家の中では扇風機が回り、お婆さんがおっぱいをはだけて布団に横たわり、団扇であおぎながら寝そべっていた。お爺さんは大きな窓枠に腰かけて、隣の母屋の自慢をした。息子が大工になって建てた家だ。立派なもんだ。おれは小作の家に生れて苦労した。おれは神も仏も信じない。戦争が終わりかけの頃、村の中で貧しいおれが常磐炭鉱に勤労奉仕に出された。仕事は坑内に入っての監督、つまりマグロを引き揚げることだ。坑夫が疲れ死ぬのをマグロと言う。坑内は蒸し風呂だ。暑くてかなわない。一週間で逃げ帰った。そしたら間髪入れずに赤紙だ。海を渡る船ももうなかったんだろう。浜松だ。通信兵をした。そうしたら、米軍の艦砲射撃だ。凄いもんだ。どんどん撃ってくる。終戦のとき、おれは上官をぶん殴って帰って来た。辛い目に遭った。おれは神も仏も信じない。

という話を一渡り聴いて、ぼくは馬鹿な質問をした。狐は？ するとお爺さんは、ああ、狐はいる。そうして、「狐に馬鹿にしえらっちゃ話」に続くのだが、神も仏も信じない人が狐は人を化かすという。同席した野村典彦氏はどう思ったろう。そこまでして型に嵌まった話を集めたいか。

だが、昔話や伝説、世間話を聴くとき、語り手の人生を含む四方山話を聴かずに語ってもらえることはなかった。一渡り自己紹介を互いに話して、そこから我が希望や相手の希望に入るのが普通だった。その交渉がわくわくと、じつは楽しかった。

日本口承文芸学会という場もおそらく同じでないか。会員同士が互いにこのような体験を交わすことが、次の我が希望や相手の希望にじつは繋がるのではないか。震災のシンポジウムするとき、みんなが我が震災の体験を語り出しかけたことがあった。ひょっとして、学会が口承の場を形作る機会を得たのではないか、と期待して名古屋での体験を話し始めたら冗長だと窘められた。今年度大会の末吉正子氏の講演で、アメリカのストーリー・テリングで人気だという「パーソナル・ヒストリー」のしやっこを実践しながら、ぼくはぼんやりと考えていた。

みなさん、大会や研究例会に出てきてください。

(兵庫県)

「〈都市語りの可能性（2）〉

♪シマグチの響きにふれてみませんか～東京での奄美シマウタ伝承」



一昨年度の東京竹富郷友会をテーマとする催しに続くもの。当日、会場となった國學院大学渋谷校舎3502演習室は満席で立ち見も出て、入場制限せざるを得ないというような盛況ぶりであった。全体は6部で構成され、まず「シマグチの響き」として吉野治子氏による岩倉市郎氏『喜界島昔話集』「旅人馬」をもとにした昔語りで始まった。喜界島ユミタの柔らかな響きが耳に残った。次いで、コーディネーターの酒井正子氏による報告「奄美諸島でのシマことば（シマグチ、シマユムタ）の動向」。シマウタの土台となるシマグチをめぐる捉え方の変遷や現状など、とりわけ戦後の日本復帰運動などとも関わる方言の禁止、そしてそれが方言の尊重へと転じる動きについて、奄美の人々の体験を記した資料などをもとにしながら具体的で詳細な報告がなされ、また歌とともにその由来をシマグチで語るという試みが近年なされていることも紹介された。

次に、「東京での島唄教室設立の前後」と題して関玲子氏・林延宏氏によって設立時の頃のエピソードや朝崎教室のニューヨーク公演時のエピソードの紹介がなされ、続いて「島唄教室の継続」と題して1989年発足の東京奄美サンシン会の活動紹介と実演がなされた。現会主の本田氏の、東京に出てシマウタのサンシンを聴いて涙がボロボロと流れシマウタを習うきっかけになったというお話は感動的だった。小川学夫氏がウタシャ誕生のかたちの一つに、島を離れて異郷でたまたま島唄を聴き衝撃を受けてシマウタに熱中しウタシャになるという場合を挙げている（『「民謡の島」の生活誌』PHP研究所、1984年）ことを想起させる体験である。この会には奄美出身者や二世、三世の人たちだけでなく、本土出身者も広く参加しておられるとのことだが、島唄のさまざまな要素がどう変化することによって広く受け入れられ、継承されることになったのか。これとは逆に、野村敬子氏の発言にあったように島を離れた東京で古いかたちが伝えられているということも考えられよう。また、他の都市、たとえば神戸や大阪ではどうか。こうした問題は今後さらに深められてゆくこととなる。

次いで、「島唄の全国的認知」の実例として、吉田良夫氏による東京でのライブ企画・広報サイトとライブスポットの紹介、いま活躍中の牧岡奈美・徳原大和・里朋樹という若手ウタシャの素晴らしい実演などが行われ、そして最後には恒例の六調で会場はおひらきとなった。

大変充実したひとときであった。地域のことばによって支えられる歌掛け文化はそのことばが衰退してゆくと危機に瀕することとなる。そのようななかで、東京奄美サンシン会の活動から文化の継承について学ぶところは大きい。東アジア・東南アジアの各地に歌掛け文化が存在するが、同様にことばの衰退などの困難な問題を抱えている。こうしたことをめぐって、いつの日か、これら歌掛け文化を継承する人々が一堂に会して話し合うようなシンポジウムを開催できないのかと夢想したことだった。

（京都府）

第41回日本口承文芸学会大会 テーマ「アメリカ大陸の口承文芸」

公開講演報告1

重信 幸彦

唐澤 秀子氏「アンデスで「ワロチリの神々と人びと」に出会うまで

- 「アメリカ」大陸のさまざまな人びとと言葉

唐澤秀子氏は、1973年から約4年間、パートナーの太田昌男氏と中南米各地で旅を続け、その後お二人は、編集室インディアスを運営し、ラテンアメリカ先住民の歴史や文化を扱った「インディアス群書」を出版し、またアンデス先住民をテーマに映画を撮るホルヘ・サンヒス率いるウマカウ集団の作品を紹介し続けている。

南米には、スペインによる侵略と支配、そして後の独裁政権による圧政と政情不安などの歴史が刻まれ続けてきた。今回、唐澤氏は、そうした中南米での旅の経験を、殊に、ことばをめぐる民衆の闘争と抵抗の実践に出会ったことを中心に、印象深く語られた。

メキシコでは、今もなお脈々と生きているスペイン征服以前のことば、ナウアトル語に遭遇し、ちょうどサモサ独裁の晩期に重なったニカラグアでは、スペイン語と混交したナウアトル語で上演される音楽劇「グエングエンセ」を知る。スペイン語話者にはわからない、ナウアトル語によるもう一つの意味が輻輳するある種の抵抗が仕掛けられていた。コロンビアでは、先住民の土地回復運動の実践と出会い、読み書きができず、私有の観念そのものがなかった先住民の歴史と記憶を掘り起こしながら、実際に土地を開墾して使っていく運動の思想に触れる。

エクアドルで、念願のボリビアの映画集団、ホルヘ・サンヒス率いるウマカウに出会う。サンヒスの映画「大地の敵」を見たとき、そのなかの長老が長々と語る部分が余分に感じたと言った唐澤氏に、サンヒスは、そこそが、長老が語りそれについて皆で話し合う寄合の慣習に根差した、声のことばのなかで生きる「語り合う人々」が培った文化に触れた部分なのだと応えたという。

そしてペルーで、人類学者が訳した先住民の伝えた「ワロチリの神々と人々」を知る。それは、邪教排斥のためにキリスト教神父が先住民の信仰を調査した記録がもとになっていたが、唐澤氏は、そんな文字を超えてなお「声」のことばの力とそこに刻まれた語り手の喜びが伝わるのを感じることができたという。

こうした旅を経て、編集室インディアスが、インディアス群書の一冊目として紹介したのは、アンデスの鉾山に生きる主婦ドミティーラが自らの半生を語った『私にも話させて』（唐澤秀子訳・現代企画室、1984）であった。そこにもまた文字を超えて「声」のことばが生み出す力がみなぎっている。

今、唐澤氏は、あの旅で出会った「ワロチリの神々と人びと」を翻訳中なのだという。

（東京都）



末吉 正子氏「私が出会ったアメリカの語り」

末吉さんは32歳のころからストーリーテラーをされていた。初めは、佐倉市の図書館で8年間のボランティア活動をされ、その後駐在員家族として渡米された。場所はコネティカット州オールドグリニッジで、滞在期間は3年半。渡米前から佐倉市で家庭文庫を開き、その家庭文庫や図書館ではお話し活動もされていた。駐在地でも、日本から本を運んで、家庭文庫を開かれた。1990年当時は、日本人駐在員が多かったので、末吉宅にも多くの子どもが集った。

その噂を、地元のペロットメモリアルライブラリーの図書館員であるケイト・マクレランドさんが耳にした。そして図書館に足を運ぶ日本人が少ない事態を打開するため、ジャパニーズストーリータイムを開くことをケイトさんが依頼したことからお二人の関係が始まった。このケイトさんとの出会いが、末吉さんの語りにとって全ての始まりと言っても過言ではないくらいとなった。

ケイトさんは優れたストーリーテラーであり、その育成者もあり、さらに全米の絵本大賞・児童文学賞の審査委員長を務めるほどの人だった。そんな彼女をとおして末吉さんは「参加型のお話」に出会った。子どもたちに例えば、動物の鳴き声を叫ばせるなど声を出させる。その動物の鳴き声や仕草をストーリーテラーが表現した。ケイトさんは小中学校へも図書館から語りに行っており、中学生も参加型のお話喜んで加わっていた。

他にも、2ヶ月に一度開かれた「大人のための語りの夕べ」では、車座になって互いの話を分かち合った。まず末吉さんの話をケイトさんが紹介した後、末吉さんが日本語で語った。これらがきっかけとなって、末吉さんもさまざまな語りのフェスティバルに出演された。

さて、その中に堂々と語る男の人がいたが、彼は劇場で語るアクターのモノログだと批判された。アイコンタクトをしないためだった。この語り手と聞き手のコミュニケーションに関しては、グリニッジ市教育委員会主催の英語の講座でも末吉さんは学ばれた。ストーリーテリングとアクティブ(ドラマ)クラスで英語を習った際、アクティブクラスでは、先生はドラマのモノログを話す時には、相手の頭の上を見るようにして、バリアを張って、ドラマの世界に入り込むようにと指導された。一方、ストーリーテリングのクラスでは、アイコンタクトをするようにと指導を受けた。語り手と聞き手が語りを分かち合うという指導だった。

このようにアメリカでは、どこに行っても、聞き手とのコミュニケーションを大事にしていた。さらに日本のいろいろ端の語りと一緒に、先住民族の語り手が「ヘーイ」というと聞き手が「ホー」と返すやりとりもあった。また、パーソナルストーリー(自分史)が多く語られ、分かち合われていた。

こうしたアメリカの多様な語りの紹介後に、参加者は、末吉さんが語る参加型の昔話(タイの「自由の鳥」)を体験し、二人一組となって互いに自分史の分かち合いをして講演終了となった。アメリカの語り的一端に、直接触れることができ、参加者も共に語りを楽しんだ講演であった。(東京都)



川田 順造氏

「アメリカ先住民の口頭伝承から「因幡の白兔」を再考する - レヴィ=ストロースによる分析」

本講演はまず「文化の三角測量」の説明から始まった。ある社会や民族の文化を立体的かつ客観的に理解するためには、他に二カ所、異なる社会や民族における類似の文化を調査し、三者を比較することが望ましいとする。川田氏ご自身も、フランス・アフリカ・日本を三点の観測地として選び、研究を進めてこられたという。

続いて、『古事記』に記載された「因幡の白兔」説話を、かつて日本列島もその一部だったスンダランド(現インドネシア西部)や、1万5千年前まで陸続きだったベーリング地峡を通過して移住したとされるアメリカ先住民の口承文芸と比較するという、日本・東南アジア・アメリカ大陸の「三角測量」によってその起源と伝播に関する仮説を提示したレヴィ=ストロースの論考「因幡の白兔」(川田訳『月の裏側 日本文化への視角』中央公論新社 2014年所収)を紹介された。

そして、日本人研究者による本説話の主な論点として、「和邇」と記された動物をめぐる「ワニザメ=鱧(フカ)説」と「鱶(ワニ)説」があること、東南アジア起源説とシベリア先住民(東北アジア)起源説があることを紹介され、さらに「因幡の白兔」では「兄弟葛藤」モチーフと「水獣や魚による陸地への送り届け」モチーフが別々に登場するが、アメリカ先住民の類話では有機的に結合した形で登場すること等を論拠として、本説話はスンダランドを起源とし、1万5千年前の民族の移動とともに、日本を経由して、ベーリング地峡を経てアメリカ大陸の南部まで伝播したと結論づけられた。但しそれは、現在アメリカ大陸に残っている類話が1万5千年の間全く変わっていないということではあるまい。この話型の基幹をなすいくつかのモチーフ、「兄弟葛藤」「水獣や魚による陸地への送り届け」「奸計とその失敗」等からなる「話の種」が、民族の移動と共に伝播した後、それぞれの土地で芽を出し、さらに周辺の文化から新たなモチーフを取り入れながら、その風土に適応する形で枝を伸ばし、葉を伸ばし花開いたとする、いわゆる「オイコタイプ」として各地の類話はあるものと理解したい。また、例えば稲田浩二がシャーマニズムに由来し東北アジア起源と見た「兔の瀕死の苦闘とその再生」モチーフをはじめ、本話を構成するモチーフごとに成立・伝播の時期や経路は異なっている可能性も考えるべきだろう(稲田『『稲葉の素兔』試論』、『昔話の源流』三弥井書店 1997年所収)。

ともあれ、気宇壮大なお話を時間の経つのも忘れて堪能できたことに心から感謝したい。

(大阪府)



後藤若菜氏「宮沢賢治「鹿踊りのはじまり」創作の発想はどこからきたのか

- 岩手県奥州市江刺区玉里の角懸鹿踊をめぐって

本発表は、宮沢賢治が大正13年(1924)に刊行した童話集『注文の多い料理店』(1)所収の「鹿踊りのはじまり」を執筆する際、この童話の着想を現在岩手県奥州市江刺区玉里で演じられている「角懸鹿踊」から得た可能性を論じたものであった。具体的には、賢治が大正6年(1917)8月から9月にかけておこなった「江刺郡地質調査」の足取りを先行研究から跡づけ、賢治が玉里の「角懸鹿踊」を実見し、その感動が執筆動機につながった可能性は高いと結論づけた。

発表者の綿密なフィールドワークと多様な文献からの考察であったので、発表内容として十分聞き応えのあるものであった。ただ、全体として「可能性」を論じている点にとどまっていることに物足りなさを感じた。賢治が玉里の「角懸鹿踊」を実見したことを示す具体的な資料については、現時点で見出せないようである。とすれば、他地域の「鹿踊」の鑑賞や書物から得た知識、あるいは知人から聞いた話などによってこの童話の着想を得た可能性も指摘できるだろう。

本発表は、こうした課題が見受けられるが、民俗芸能と近代文学というこれまであまり論じられてこなかった視座からの研究として大変意義深いものである。加えて、高木俊雄の「童話」論など大正年間の口承文芸研究史を考える上で重要な研究視角を提起したものとして本発表を位置づけることもできる。今後のさらなる展開が期待できる発表であった。

清野知子氏「百合若伝承 - 寺社伝説を中心として」

本発表は、各地の百合若伝承の中で大分県大分市にある萬寿寺のそれに焦点を絞ったの考察であった。具体的には、萬寿寺の縁起等が記されている『禅余集』という書物や幸若舞曲の語り台本を読み物用に転用したテキストとされる『舞の本』所収の「百合若大臣」を取り上げ、この伝説と関連する行事や史蹟等にも目配りしながら萬寿寺の縁起成立について論じていた。

発表者の調査に基づいて提示された史資料及び論点は、大変興味深いものであった。しかしながら、各資料の提示方法やその読み込みについては、問題点も散見された。例えば、市場直次郎編『豊国筑紫路の伝説』(第一法規、1973年)が資料として提示されていたが、編纂事情等についての明確な説明がなく、フローアからも意見が出された。

市場は、昭和6年(1931)年に『豊後伝説集』を編んだ。この時は「所収の伝説は聞き書きを本体とし、文献に依(ママ)つたものは極(ママ)く少数である」と例言に示している通り、聞き書きから得たデータに基づく資料集であることがわかる。また、『豊後伝説集』は、異伝がある場合にはそれも記述し、話者名も示されている。本発表と関わる「百合若大臣塚」の項目をみると本編とは別に4話の異伝が提示され、この伝説と関わる興味深い事例が看取できる。今回の発表で示された自らの調査に基づくデータと併せて、こうした文献にも配慮しながら、今後のより豊かな研究成果を期待したい。

(千葉県)

内藤久義氏「説経と谷ノ者 - 『かるかや』『中将姫御本地』から」

内藤久義氏は、「説経と谷の者—『かるかや』『中将姫御本地』から—」と題して、中世・近世に卑賤視された〈谷ノ者〉が、説経の物語の登場人物となっていることの意義について発表された。特に、高野山文書にみえる「谷ノ者」の職掌を検討するとともに、説経における主人公が流離から復活蘇生の後、「外的世界に飛躍」し「復讐を行う」パターンと、流離から「〈谷〉という再生の場」へ、さらに「宗教的な内的世界へ沈潜する」パターンとがあることを指摘された。内藤氏は両者を「外的世界の物語」と「内的世界の物語」と呼ぶ。そして、特に「内的世界の物語」が、卑賤視された人々の「差別と排除の記憶を物語とした」ことを論じられた。また、画像においても絵画資料における〈谷ノ者〉に関する知見を示された。

質疑応答の中では、内藤氏が説経を「二つのパターン」に分割する必然性が何か、分けたことの有効性は何か、という質問が出た。つまり、いわれるところの二つのパターンの差異は、応答の中で、テキストの根本的な差異かどうかは、発表をうかがった限りではなお不明であるという意見があった。また、内藤氏は、説経の〈谷ノ者〉と、説経を語った担い手とでは層が異なることにも言及されている。おそらく説経を生み出し、語った側の人々と、これを享受した人々との緊張関係については、今後の課題となるであろう。

阿部幹男氏「八戸城下の奥浄瑠璃 - 新資料紹介」

次に、阿部幹男氏は、「八戸城下の奥浄瑠璃—新資料紹介—」と題して、八戸藩の四代にわたる『遠山家日記』という歴大な資料から、奥浄瑠璃に関する多様な記事を分類、紹介するという精力的な調査に基づく発表をされた。例えば、奥浄瑠璃が、船による出立や祝事、仏事などにおいて興じられた事例を紹介された。また、御伽草子「むらくも」の前段階にあたる「中世語り」の事例についても紹介された。

質疑応答の中で、興味深かったことは、八戸と熊野や大坂・上方との交渉の活発さが話題となったことである。また、阿部氏は、みずから録音された語りを会場で紹介されたが、在地における奥浄瑠璃の生態とはどのようなものか、文献資料とどうかかわるか。また、口承文芸の研究からいえば、古浄瑠璃や説経浄瑠璃の本文については、すでに翻刻資料も知られているが、これだけでは読み方が分からない。それゆえ、語りと資料、本文の表現との関係について、もっと詳しく教えていただきたいという意見が出た。今回の阿部氏の発表は、芸能の基盤や享受の歴史的記録の紹介としてまことに意義深い。が、文芸の在地的、歴史的な解釈や意味付けや、御伽草子と奥浄瑠璃との関係の解明などについては、なお研究が深められることを期待するという意見が多く聞かれた。

(大阪府)

山口くるみ氏「千葉県鯛の浦におけるタイの食物禁忌」

本発表は食物禁忌の成立背景や現在の伝承のあり方を明らかにすることで、禁忌研究を発展させるとともに、人間と生き物の関係性について考えるという目的をもっておこなわれた。

先行研究の紹介から、対象とするマダイの生態、伝承地である鴨川市小湊、誕生寺、鯛の浦の概要を紹介し、鯛の浦のタイ食物禁忌の成立背景と現在の伝承を聞き取りの内容紹介から始め、多くの文献を踏査して報告した。文献上の初出を明らかにし、由来とされる日蓮との関わりとは別の理由で漁撈が禁じられ、そこに棲息していたタイが特別視されていったと思われること、また日蓮宗において日蓮誕生時の三奇瑞のタイにまつわる伝説はこの土地独自であったことをつきとめた。また、現在どのような鯛の浦タイ食物禁忌の伝承があるのか、伝承地・小湊と隣集落・内浦との禁忌意識の違い、遊覧船による経済活動をめぐる問題、弁天まつり、鯛供養のきっかけとなる語りについて地域比較をおこなった。詳細な調査から、現在の伝承はタイ食物禁忌への敏感な心意とその対処、経済的・信仰的な理由に基づく日蓮宗・タイ・小湊相互の強い結びつきであることを指摘し、タイの食物禁忌が鯛の浦という場と大きく関わり、日蓮の伝説以前の由来があった可能性があるとし、今後はその可能性を探りたいとまとめた。

フロアからは詳細な資料提示を評価する声とともに、新たな資料の教示があった。またマダイが国の天然記念物にいたる際の地域の状況など、新たな調査課題も提示された。

斎藤みほ氏「現代における昔語り - 昔語りを取り結ぶ語り手と聞き手との交流」

本発表では現在にみる昔話の語りの場において、特に語り手と聞き手とのやりとりや関係性といった、語りによる交流に注目し、そこにどのような実践が伴っているかを調査報告し、考察した。

先行研究紹介の後、現代の語りの現場において聞き手が「語り」にどのように関与しているか、どういう点から語り手は聞き手とのつながりを感じるのかという点に注目して報告がおこなわれた。調査は青森県津軽地方中泊町(旧小泊村)でおこなわれた。語り手T氏は同地出身で、40年間を保育園で勤めた後、退職後はさまざまな地元施設、近隣の観光施設やイベントで、個人で昔話を語るボランティア活動を続けている。T氏が語る昔コ・昔ッコ(津軽弁で昔話)を祖母から聞いて覚えた「口承の昔コ」、本から覚えた「書承の昔コ」、創作した「創作の昔コ」に分類して考察した。保育所での参与観察から、語りの場は物語の世界を共有し一緒に「遊ぶ」場であり交流の場であることが指摘された。また、昔コの語り以外のパフォーマンスのなかで昔コが語られることが聞き手を巻き込む仕掛けになっている点も指摘した。また「書承の昔コ」の役割は、子どもたちの関心を引くためとし、T氏の語りの場にはその技術だけでなく、場づくりの仕掛けと実践があり、それは聞き手への配慮であり、その配慮と実践が子どもたちの昔語りへの参与を円滑にしたと考察した。そのうえで、昔話の語りによって生み出される異世代間交流や関係性の価値への見直しをおこない、今後昔話が語り継がれていく可能性を考えたいとした。

フロアからは昔コの組み合わせ方に対する、長年の調査経験からの示唆があった。(愛知県)

北原次郎太氏「アイヌ民族の動物変身譚について」

動物が人の姿になる変身譚がさまざまな民族に見られることはよく知られているが、アイヌ口承文芸の世界観では動物(神)の神界での姿は人型なのであり、散文説話にみられる人との婚姻譚では「人→動物→人」という2段階の変身タイプがみられ、その表現は「衣装の着脱」という比較的明快なものである。

日本民話といえばキツネとタヌキがおなじみであるが、そこではキツネが狡猾で女性的なイメージであるのに対して、タヌキは愚鈍で男性的なイメージである。しかしアイヌ口承文芸ではキツネの伝承は豊富にあるものの、タヌキの伝承は採録例が極端に少ない。日本民話におけるタヌキのイメージをアイヌ口承文芸にトレースすると「愚鈍、男性的」なタヌキの立ち位置はヒグマが担っているように見える場合があり、キツネの伝承も周辺民族の妖狐譚などの影響を受け狡猾なイメージが伝播し派生した可能性があるのではないかという見解が示された。またこうした「2度の変身」はアイヌ散文説話の世界にみられる特色であり、送り儀礼の世界観とは合致しないのに採録事例が多く分布域も広いのは何故かという問題も指摘された。

アイヌ文化のみではなく北方諸民族の伝承や日本民話も含め俯瞰的に見るという示唆に富む内容で、質疑応答ではさらなる婚姻パターンについての提言も出て、こうした問題への関心の高さをうかがい知ることができた。

狩俣恵一氏「沖縄の「伝統的な言語文化」と「シマ言葉」の継承について」

琉球語は大きく北と南に分かれ、前者がさらに与那国、八重山、宮古の諸方言に、後者が沖縄中南部、沖永良部と論沖繩北部、奄美徳之島の諸方言に分類される。これは想像にしか過ぎないが、方言間における「自分達の言葉」という思いは、陸続きであるよりも、いくつもの島が連なるという琉球列島独特の地理的条件の中でより強く意識されるようになったという面もあるのではないだろうか。

琉球方言にはウチナーグチ(中央語)という中心的な方言が存在する。これに対するシマ言葉(地域語)はとても数が多く、その日常語「しまくとうば」の分類は800語を数えるという。これらについていくつものテキストを作成するという労力は想像を超えることである。それらもさることながら、教材ができたとしても指導する人材がないという問題に直面してしまうのだという。しかし「自分達の言葉をなくしてはならない」という意識は高く、できることから進めている現状が垣間見えた。

「おもしろさうし」など琉球古文の歴史的な資料も取り上げつつ、新語・俗語の紹介も含めた狩俣氏のウィットに富んだご発表は、難しい問題にも決して深刻ぶらないかの地のポジティブな空気を感じることができ、必殺技に方言を使うご当地ヒーロー「琉神マブヤー」が生まれたということも領けた。

日本列島の様々な場所で言葉の復興問題に取り組む人達が、ご発表から得るところは大きかったであろう。

(北海道)

シンポジウム報告「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」

口承文芸学会のメンバーの多くは、こんにちの日本および世界で口承文芸のテキストがどのように保管され、公開されているのか、また今後どうあるべきかについて関心を抱いたことがあるだろう。今年の大会シンポジウムはこの問題に正面から取り組み、広い視野をもって検討しようという企画だった。そこで司会の中川裕氏がパネリストとして集めたのは、専門分野もデジタルアーカイブとの関わり方も異なる4名である。登壇順に、本シンポジウムの発案者でありロシア・フォークロアの現地調査資料のデータベース化を進めている熊野谷葉子、アイヌ民族博物館でアイヌ語アーカイブの作成と公開に取り組んでいる安田益穂氏、国立歴史民俗博物館で民謡データベースの運用に携わり、人文情報学を専門とする後藤真氏、日韓の膨大な昔話資料を検索できる「東アジア民謡データベース」を作成した樋口淳氏である。約3時間のシンポジウムでは、まずこの4名がそれぞれの手がけるデジタルアーカイブについて紹介し、休憩をはさんで小一時間、約80名の参加者を交えた活発な討論が行われた。

熊野谷はまず、現在のフォークロア研究の世界的な動向の例として、ロシアで口承文芸資料をデジタルアーカイブ化しインターネット上で公開しているプロジェクトの数例を報告した。膨大な叙事詩のテキストと文書館所蔵の録音とを関連付けて公開したロシア科学アカデミーのサイト、音楽資料に衣装や暦の記述も併せて掲載したモスクワ音楽院のサイトのほか、ウェブ公開ではなく多様な資料をリンクさせたディスクを販売する例も紹介された。これをふまえて報告者は、自分自身の調査資料を相互に関連づけた総合的デジタルアーカイブを作成し、さらに一般向けのマルチメディア出版物を出す計画について話した。

アイヌ民族博物館の安井益穂氏は、同館所蔵の音声資料670時間、映像資料500時間分が順次デジタル化され、その一部がデータベース化されて一般に利用できるようになっている状況を説明した。同館ホームページのアイヌ語アーカイブでは、単語や地域、人名、キーワードなどで検索をかけると、該当する箇所アイヌ語文と日本語訳が表示され、アイヌ語音声を聞いたり動画を見たりすることができる。3年かけて行ったこのアーカイブ作成プロジェクトによって若手アイヌの文化伝承が進み、録音された語りを実演する新しい語り部も現れた。デジタルアーカイブが口承文芸の再生のきっかけとなっているのである。

国立歴史民俗博物館の後藤真氏が報告した同館の「民謡データベース」は、主に1980年代に行われた文化庁の「民謡緊急調査」で集まった民謡の録音とその他の情報をデジタル化し、利用可能にしたものである。音源はCD化され著作権の問題もないが、その他の理由のため利用できるのが千葉県佐倉市の歴史民俗博物館の館内に限られるため利用者が少ない。後藤氏はまた「人文情報学(Digital Humanities)」についても紹介した。人文科学分野で蓄積された音声、動画、文書資料のデジタル化は、フォーマットの適切性、権利問題、データの脆弱性などの問題はあがあるが、その「発見可能性」はアナログデータの比ではない。日本でも近年認知度が上がっているこの学は、まさにデジタルアーカイブに正面から取り組む分野である。

最後に登壇した樋口淳氏は、世界のデジタルアーカイブには、オリジナル技術で収蔵品を公開する「ミュージアム型」と既存の技術を利用したデータベースを公開する「汎用型」があると論じた。前

者は各アーカイブの資料を分かりやすく展示するには適しているが、他のデータベースとあわせた資料検索はできない。だが、樋口氏が作成した「東アジア民話データベース」はファイルメーカーを使用した汎用型で、多言語対応のため、将来的には世界中の口承文芸資料を合わせて検索することも可能である。現在、このデータベースには6万話以上の民話が格納されており、利用者は話のタイトルや語り手、採録地など様々な検索を通して多様な民話を聞くことができる。樋口氏はこのデータベースを更に多ジャンルに拡大した「世界口承文芸アーカイブ」を日本発で作る試みを提案した。

こうした報告を受けて会場からは、紹介されたデータベースの技術を自分たちも使えるか、といった質問や、語り手と採録者の権利に関する質問・意見等が出て、活発な議論が交わされた。学会としては、まず既存の口承文芸デジタルアーカイブについての情報交換が必要だという認識で一致した。本シンポジウムは、学会員が世界の口承文芸デジタルアーカイブの状況にふれ、個人や所属先が所蔵する資料の整理と活用について考えることに扉を開いたと言えるだろう。

(千葉県)

日本口承文芸学会編『こえとことばの現在-口承文芸の歩みと展望』刊行しました 日本口承文芸学会 40 周年記念氏編集委員会

既にお知らせしましたように、右の通り、日本口承文芸学会が企画編集した日本口承文芸学会 40 周年記念誌『こえとことばの現在-口承文芸の歩みと展望』が今春刊行されました。出版社のご高配により、下記の通り学会員には特別価格で提供くださることになりました。ぜひお求め賜りますようお願い申し上げます。

1 冊の場合 2,400 円 + 送料 450 円

2 冊以上の場合

2,400 円 × 冊数 送料なし

注文申し込み方法について

(1) 三弥井書店 (TEL 03-3452-8069、FAX 03-3456-0346、<http://www.miyaishoten.co.jp>) 吉田智恵宛に直接ご連絡ください。

(2) 三弥井書店 (〒108-0073 東京都港区三田 3-2-39) ハガキでご注文ください。

日本口承文芸学会 40 周年記念誌

こえとことばの現在

日本口承文芸学会 編
A5判・カバー装 336頁
定価：2800円＋税

口承文芸の歩みと展望

口承文芸の現在はどこにあるのか。最前線をとらえ、その動向を明らかにする。

目次 学会会員価格：2400円＋送料450円
2冊以上の場合は送料は小社負担

◇論考編◇
 昔話
 童話・昔話、民話研究の足跡(花部英雄)／現代の語り(杉浦邦子)／昔話と教育—小学校での語り活動を中心に(立石展大)／子どもの語りからみた想像力の発達—物語・想起・創造のメカニズム(内田伸子)
 伝説
 「伝説」という問い—その成果と可能性(小池淳一)／災害伝承と死者供養(川島秀一)／読書・旅・趣味(齊藤 純)／美談のパラダイム—孝子、軍国の母、そして偉人(伊藤龍平)
 世間話
 「話」という言語実践へのまなざし(重信幸彦)／都市伝説とメディアの変遷—都市民俗・ネットロア・SNS(飯倉義之)
 謎・謎・命名・歌
 子どもの「主体的・対話的で深い学び」につなげる研究私史(高木史人)／語られる歌の生成と様式性—奄美島唄を中心に(西井正子)／歌謡と歌い手(真下 厚)
 国際比較
 昔話の国際比較(間宮史子)／アイヌ口承文芸研究の課題(奥田純己)／ロシア叙事詩研究の特徴と変遷(熊野谷葉子)／イギリスの口承文芸(美濃部京子)

◇事項編◇
 口承の語りと構造(鶴野祐介)／口承の実践(山東正昭)／話型(川森博司)／口承と叙述(藤久真菜)／口承文芸のジャンル(石井正己)／出版文化メディアと口承文芸(米屋陽一)／生活語(方言)と標準語—沖縄の方言と琉球土族語(琉球文)—(狩俣恵一)／伝説と歴史(内藤浩智)／語られる暮らし(根岸英之)／ことば遊び(小堀光夫)／文化資源としての口承(遠志保)／口承の発生と伝播(山田仁史)／口承とシャーマニズム(真鍋祐子)／叙事詩と語り手—中央ユーラシアを例に—(坂井弘紀)／国際昔話話型カタログ(加藤耕義)／ロシア発—世界神話・フォークロアモチーフのインターネットカタログ(直野洋子)

2017/4/30刊行



ISBN978-4-8382-3320-5

三弥井書店
電話03-3452-8069
<http://www.miyaishoten.co.jp>
担当：吉田智恵
FAX03-3456-0346

送り先ご住所 _____ TEL _____

お名前 _____

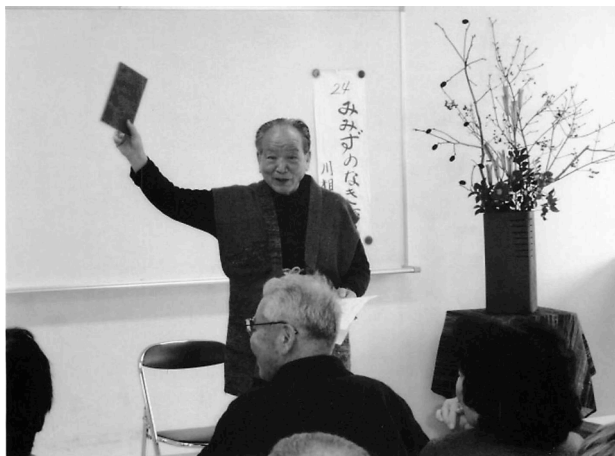
上記書名に一部誤りがありましたことをお詫び申し上げます。

◆岡山県語りのネットワーク

語りの学校

立石は長年にわたって民話の採訪を続けているが、1980年代になって昔話の採録が困難になってきた。これでは昔話を含め民話の伝承が途絶えてしまうのではないかと。心をわくわくさせて子どもたちが語りを聞けなくなるのではと危機感を持つようになる。

それでは自分で語りをしようと、1983年から地元小学校などで語り始める。次第に昔話を聞きたいという要望が多くなり、仕事をしながらでは対応できなくなった。語り手を増やさなければと思い立ち、1999年にやっと「お母さんの話し方講座」を哲西町（現新見市）で開催できた。哲西町が、600話の語り手賀島飛左の町である。対象を子育て中の母親としたため、子育てと仕事で忙しく、出席率が極端に悪く、語り手とグループ化は失敗。



2000年に退職して、しっかり準備し「立石おじさんの語りの学校」【写真】を美星町（現井原市）で開校。対象を退職者、子育ての終わった女性を中心にした。そこで語り手ができ、グループの結成ができていった。その後、今回まで各地で学校を開き、語り手とグループを作ってきている。学校は、これまで50か所以上で約1000人が受講している。

語りの学校は、基本は6回講座で、1回が2時間。1時間が民話や語りの基礎知識、1時間が語りの実技。岡山県内で伝承されてい

る昔話など民話を、古くから伝承されてきた語りに学んで、自分の言葉で語るというやり方。修了者の多くは語りができるようになる。なお、学校は、公民館、図書館など自治体が開催し、立石は講師で呼ばれ指導する形をとっている。これが長続きする秘訣でもある。

語りのグループを作ることで、語りの活動が持続でき、語りの継承には欠かせない。修了生を中心にグループを作り、みんなが協力して活動をしていくように援助する。グループでは、原則月1回の勉強会・連絡会を開いている。語る場所は、小学校、幼稚園、保育園、子ども会などで子どもに、そして老人サロン、老人施設、病院などで主に高齢者に語る。いずれもボランティアが原則。グループは年1回以上の語りの会を開催、地域住民に聞いてもらう。現在24グループ（約250人）が活動しており、2016年度には、のべ67,710人の人が語りを聞いてくださった。

語りのネットワーク

グループの活動だけでは、視野が狭くなり、語りも活動も我流になる傾向がある。そこで交流と情報交換、学習のためにネットワーク化を考えた。2007年に岡山県で全国生涯学習フェスティバルが開

催されたとき、メイン会場にブースを借り、2日間語りを行った。大盛況で参加者は大きな刺激を受け、語りに自信を持った。これをチャンスに翌2008年に「岡山県語りのネットワーク」を結成（9グループ、50人）。

語りの学校で語り手とグループを増やししながら、2010年に総社市で国民文化祭・民話の祭典を、2012年に倉敷市で全日本語りの祭典を開催し成功させた。これらの中で、語り手やグループ間の連帯が深まり、語りへの自信ができていった。また、今年2017年には、念願だった中国5県の交流会を松江市で開催でき、成功によって中国地方での交流が始まった。グループでの地道な活動と、大きな交流会を結びつけることで、グループが活性化していくことがよく分かった。

ネットワークでは、年1回の総会と2回の語りの交流会を開くとともに、ニュースの発行や各グループの行事の知らせなどで、グループ間のつながりを強めている。その結果、各グループの語りの会には、他のグループからも聞きに行き、語りの学ぶ場になっている。また、2013年から月1回、「語りの指導者養成講座」を開催。立石が講師で、語りの学校で学んだことより詳しい内容の講義をし、グループ内での指導力のアップと心に響く語りに向けて学んでいる。

当面の課題

語りの活動が広がるなかで、聞き手から地元の話という要望が出てくる。これに応えるため、お年寄りから話を聞いて民話集を刊行し始めている。これまでに『勝央の民話』1、2集（勝央町）、『なぎの民話』（奈義町）、『岡山“へその町”の民話』（吉備中央町）を刊行。これらは、それぞれの語りのグループが中心になり、立石の指導、協力で刊行された。『岡山“へその町”の民話』はA5判446ページで、昔話44話、伝説176話、村話210話などを収載、3年がかりで完成したもの。これら以外のグループも資料集刊行のため調査を始めている。

資料集から民話を語るためには、再話が必要で、グループで再話講座を開いているところもある。ネットワークでは、指導者養成講座で再話を取り組み、2016年に『むかしこっぴり 吉備之国の民話』を刊行した。

語りのグループは、県内15市のうち9市、12町村のうち5町村と広島県福山市にできている。これらを全県に広げることが当面の課題である。今年開校または開校予定の語りの学校で、新たに5グループの結成をめざしている。また、子どもの語り手育成のための取り組みも始まっている。今年度の久留島武彦顕彰全国語りべ大会の子ども部門で、出場者に選ばれた7人のうち3人が、県語りのネットワークに属しているグループの指導を受けた子どもである。さらに、民話を聞いたことのない人々が多いなか、民話について知っていただくため、グループの活動などを新聞で取り上げてもらうこと、有線テレビで語りを紹介するなどの、いわゆる「広報」の取り組みも重視している。

事務局便り

○寄贈図書（2017年1月以降拝受）

- ・日本民俗学会『日本民俗学』第285・287～290号 2016年2・8・11月、2017年2・5月
- ・新潟県立歴史博物館『おふだにねがいを』 2016年3月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第49巻4～7・10～12号、第50巻1号～3号
2016年7～10月、2017年1月～6月
- ・新潟お菓子プロジェクト実行委員会・新潟県立歴史博物館『お菓子と新潟』
2016年7月
- ・国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』
第188・202～206集 2016年12月、2017年2・3月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館年報』第16号 2017年1月
- ・新潟県立歴史博物館『すてきな布 アンギン研究100年』 2017年1月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』33 平凡社 2017年2月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館研究紀要』第18号 2017年3月
- ・大野寿子（編）『グリム童話と表象文化 モティーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』勉誠出版
2017年7月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel: 03-5466-0529 (研究室)

Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP
(<http://ko-sho.org>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。